

# 第25回 芸術・文化賞 受賞者

ダニー・ユン Danny YUNG (榮念曾)

●香港/文化クリエイター



## 市民フォーラム

### あらゆる境界を超えて、人と人を繋ぐ ～ダニー・ユン氏の試み～

■開催日/2014年9月21日(日) 13:00~15:00  
■会場/アクロス福岡地下2階 イベントホール  
■参加者/200人



財政政策などが、アートにどのような影響を与えるのか、重要な問題ですね。トキのような鳥は絶滅してしまうのか、保護するのか、観賞用に取っておくのか。それは私たちアーティストも同じであり、劇場の外へ出たとき、自分たちは本当に強くあり続けられるのかと問い続けることで、私はアーティストたちをエンパワーし、力を付けさせよう

と考えていたのです。私たちは経済的、政治的にどのような影響を受けているのか。これを理解していくことが、長期的な文化の発展の中では重要です。私たちが中国で常に直面しているのが政治的な干渉ですが、最近では文化コミュニティの中で様々な議論が交わされています。政治的な干渉によって、アートがプロパガンダに使われてしまうことがあり、教育の中に取り込まれている場合もあるのです。

昆劇の演技を見るたびに、毎回違うところを発見します。なぜなら、人が伝統を受け継ぎ、体現しているからであり、人が無形文化遺産なのです。人は、博物館や美術館にモノとして飾られているわけではありません。いろいろな経験をして、多くのことを学ぶ機会があります。このような文化交流のためのプラットフォーム、つまり土台が重要であり、それを築くことで、お互いが相手の文化をよりよく理解でき、お互いの将来を考えることができるのです。



昆劇俳優による実演披露

## <第二部 パネルディスカッション>



●コーディネーター  
内野 儀  
東京大学大学院総合文化研究科教授



●パネリスト  
佐藤 信  
座・高円寺 芸術監督

### 芸術の役割は、新ビジョンを示すこと

内野儀氏が講演への補足解説と佐藤信氏の略歴を紹介。続いて佐藤氏は福岡アジア文化賞の役割について「芸術交流の面において都市間の交流が、今後はもっと大きな意味を持ち、非常に実り豊かなものになる」と位置づけ、これから花開いていく時代を迎えていくと解説します。そして「経済は今日の社会を相手にし、政治は明日の世界に関心を向けるが、文化芸術は常にあさつてを問題にする。東西の対立が終わって世界の構造が変わる中で、人類はまだ次のビジョンを共有できていない。あさつてを見つめて新ビジョンを示すことが、芸術の大きな役割。この意味でもユン氏の芸術は社会に何ができるのか、社会は芸術に何を返すかという問いかけは、非常に大きなテーマだ」と論を展開しました。

その後、ユン氏の演出作品『スピリッツ・プレイ』の映像を上映。「昆劇と能の役者がこの作品について考えを共有し、舞台の場、墓地の場、天安門広場の場などについて語り合った」と説明します。なぜ劇である必要があるのか、という会場からの質問にユン氏は「舞台の特徴はリアルスペースであり、時間も空間も観客と共有する。映画とは違って至近距離でのインスタラクション(相互作用)が起きる。ステージ上での自由があれば様々な経験ができ、多くを学ぶことができる」と語りかけました。

## VOICE



▼大学の授業の一環で、このフォーラムに参加。ゼミの卒論で京劇を取り上げ日本人と中国人の恋愛観の違いを考察するつもりですが、今日の内容が役立つと思うので、参加してよかったと思っています。(右:江口茜さん、城南区) ▼国と国ではなく、人と人のつながりを大切にいくことで、国境を越えた交流が大きな意味を持つ、という言葉が印象的でした。いろんなつながり方ができることも実感しました。(左:川口安澄さん、早良区)

## 学校訪問

■実施日/9月19日(金) 14:10~15:35  
■会場/福岡市立長尾中学校 体育館



約50名の生徒が、事前に真っ白なユン氏のキャラクター『天々向上』に自らの思いや創造を託してデコレートした個性的な作品を制作し、ユン氏の訪問を待っていました。そして、当日、生徒が持つカラーアーチの中を、ユン氏一行がにこやかに入場。ユン氏は「今回、初めて福岡に来て、みなさんに会えて非常に嬉しい」と挨拶。自分の成長過程について、「行儀が悪くてよくない子どもだったが、絵を描くことがとても好きだった。壁やテーブル、教科書などにいっぱい絵を描いたが、母親が自分の絵を好きになって励ましてくれた。」と微笑みながら話しました。そして、生徒が創った『天々向上』作品やイラスト、漫画などをスクリーンに投影しながら、生徒との交流を楽しく展開。「ユンさんにとって、天々はどんな存在ですか」という質問には「私は好奇心が大切だと思っていて、小さなときには何だろうと上を見るが、大きくなると下を向いてしまう。だから、小さなときの気持ちを忘れないことが重要」と答え、生徒と指差しポーズを真似て楽しんでいました。

## アジア文化サロン

■実施日/9月20日(土) 14:00~16:30  
■会場/九州大学大橋キャンパス3号館 321教室



福岡市文化芸術振興財団と九州大学との連携による舞台芸術に関する人材育成プログラムとして実施。冒頭、司会の佐々木達也氏から「進念・二十面體(ズニ・アイコサヘドロン)」とは何か、という質問。ユン氏は「若者たちが設立した実験的な舞台を行う芸術集団」と答え、ネーミングの由来を紹介。1989年の天安門事件と香港で最大規模のデモ行進、97年の香港の中国への返還など、数多くを経験してきた芸術集団は、今や確固たる地位を築き、香港政府の政策に常に監視の目を光らせている存在である、と説明します。続いてユン氏の舞台作品『トライアル』『スピリッツ・プレイ』などを解説を交えて上映。昆劇俳優の徐思佳氏によるゆったりとした歌声を響かせながら身体で微妙な感情を表現するパフォーマンスに参加者は魅了されていました。参加者からの「今、最も重要な社会的テーマは何か」との質問には「表現の自由を維持するため、組織や制度に働きかけていくこと」と応じました。